慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリ

Report of 2020

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開　設：2012 年 3 月 1 日
代表者：宮脇　美保子 （看護医療学部　教授）
連絡先：慶應義塾大学看護医療学部

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス）に不可欠である、(1）看護実践の質保証 (Quality）を推進する実践研究開発、(2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility）できる看護リーダーの養成、(3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore）、をめざすものである。

■メンバー

宮脇　美保子	（看護医療学部　教授）	ラボラトリ・リーダー / 倫理的看護実践研究開発
武田　祐子	（看護医療学部　学部長）	遺伝看護実践研究開発
野末　聖香	（看護医療学部　教授）	精神看護実践研究開発
永田　智子	（看護医療学部　教授）	倫理的看護実践研究開発
深堀　浩樹	（看護医療学部　教授）	高齢者看護実践研究開発
田口　敦子	（看護医療学部　教授）	看護実践研究開発
矢ヶ崎　香	（看護医療学部　教授）	がん看護実践質保証研究開発
小池　智子	（看護医療学部　准教授）	ベストプラクティス先導ナース開発研究
福井　里佳	（看護医療学部　准教授）	倫理的看護実践研究開発
福田　紀子	（看護医療学部　准教授）	精神看護実践研究開発
宮川　祥子	（看護医療学部　准教授）	看護実践研究開発
大坂　和可子	（看護医療学部　准教授）	がん看護実践質保証研究開発
朴　　順禮	（看護医療学部　専任講師）	看護実践研究開発
石川　志麻	（看護医療学部　専任講師）	看護実践研究開発
山本　亜矢	（看護医療学部　専任講師）	倫理的看護実践研究開発
新幡　智子	（看護医療学部　専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
田村　紀子	（看護医療学部　専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
杉本　美希	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
本田　晶子	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
山本　香織	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
浅川　翔子	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発
高橋　知彦	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発
加藤　由希子	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発
田久保美千代	（看護医療学部　助教）	精神看護実践研究開発
平岩　千明	（看護医療学部　助教）	精神看護実践研究開発
小林　良子	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
松嵜　　愛	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
山本　なつ紀	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
平尾　美佳	（看護医療学部　助教）	高齢者看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることにも力を注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス）に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality）を推進する実践研究開発、（2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility）できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore）、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の３つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボラトリの主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボラトリの根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者の QOL の向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探求する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

1.　「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト：化学療法による末梢神経障害に関するリスクイベント（転倒）やQOL に関する研究
2.　がん治療を受ける高齢者のフレイル予防に関する研究
3.　地域で暮らす超高齢者研究

矢ヶ崎　香	慶應義塾大学看護医療学部	教授
本田　晶子	慶應義塾大学看護医療学部	助教
杉本　美希	慶應義塾大学看護医療学部	助教
山本　香織	慶應義塾大学看護医療学部	助教
小松　浩子	日本赤十字九州国際看護大学	学長
	慶應義塾大学　名誉教授	

A. 目標

がん患者中心の最善のケアの提供を目指し、看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。さらに超高齢者に関する共同研究を推進し、成果を発信する。

B. 計画および実施過程

1. 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト
がん化学療法に伴う末梢神経障害のある患者を対象にモバイルウエラブルデバイスを用いた日常生活における転倒リスクの解明を目指す。
2. がん治療中のフレイルな高齢者を対象にした食生活に関する支障とニーズを明らかにするための質的研究を行う。
3. 地域で暮らす超高齢者を対象に日常生活における体験について質的研究を行う。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト：がん化学療法に伴う末梢神経障害のある患者を対象にした転倒予防ケアに関する研究は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、データ収集を半年以上中断した。今後も臨床での再開の見込みがたたないため、今後は SNS からの公募の方法を検討し、IRB へ修正申請を行い実施する予定である。

2) がん高齢者を対象にした質的研究は倫理審査で承認を得てリクルートを開始した。新型コロナウイルス感染症の影響でリクルートの中断と再開を繰り返した。データ収集、分析を終え、論文を国際誌に投稿した。現在査読中である。全体の予定は遅れた。

3) 地域在住の超高齢者（90 歳以上）の日常生活に関する質的研究を開始した。本調査も緊急事態宣言解除時にデータ収集を行い、併行して分析を進めている。次年度中には、データ収集を終え、データ分析、論文作成を開始できる見込みである。

２．今後の課題、展望

新型コロナウイルス感染症の影響で、どの研究も大幅に遅れが生じている。今後も各専門分野の研究者と共同研究を進め、患者（当事者）や臨床実践および地域社会に研究を通して貢献する。

３．2020 年度の業績

【学術論文】

1. Komatsu H, Yagasaki K, Oguma Y, Saito Y, Komatsu Y. The role and attitude of senior leaders in promoting group-based community physical activity: a qualitative study. BMC Geriatr. 2020.2;20(1):380. doi: 10.1186/s12877-020-01795-2.

2. Komatsu H, Yagasaki K, Yamaguchi T, Mori A, Kawano H, Minamoto N, Honma O, Tamura K. Effects of a nurse-led medication self-management programme in women with oral treatments for metastatic breast cancer: A mixed-method randomised controlled trial. Eur J Oncol Nurs. 2020;47:101780.

3. Komatsu H, Yagasaki K, Sato Y, Arao H, Yamamoto S, Hayashida T. Evaluation of the Japanese Version of the Cancer Survivors' Unmet Needs Scale. Asia Pac J Oncol Nurs. 2020. 14;7(2):167-173. doi: 10.4103/apjon.apjon_49_19. eCollection 2020 Apr-Jun.

研究 1. 生体センサを活用した心不全患者のための「こころと眠りの支援プログラム」開発と評価
研究 2. 感染症パンデミックにおける精神看護専門看護師による看護職への支援
研究 3. COVID-19 による外出自粛生活における看護系大学生の睡眠と精神的健康の実態

野末　聖香　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福田　紀子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
田久保美千代　慶應義塾大学看護医療学部　助教
平岩　千明　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

研究 1（研究メンバー：野末聖香 , 福田紀子 , 田久保美千代 , 久保美紀 , 佐藤雅明 , 白石泰之 , 中野直美）
心不全患者の睡眠とうつ･不安に焦点をあて、生体センサを活用し、web を介して遠隔的に支援する「こころと眠りの支援プログラム」を開発し、その効果を検証する。

研究 2（研究メンバー；野末聖香 , 福田紀子 , 田久保美千代 , 平岩千明）
COVID-19 拡大下における精神看護専門看護師による看護師への心のケアの構造とプロセスを明らかにし、感染症パンデミックにおける心のケアマニュアルを作成する。

研究 3（研究メンバー：野末聖香 , 福田紀子 , 松本奈央）
COVID-19 による外出自粛生活における看護系大学生の睡眠、ストレス、精神的健康の実態およびこれらの関連を明らかにし、看護学生に必要な支援について検討する。

B. 計画および実施過程

研究 1：2019 年度に引き続き、心不全患者の睡眠状態、精神状態、セルフケアに関する実態調査を継続実施した。また、生体センサを用いた睡眠データの収集・集約に関する実施可能性の検討を目的とした調査を実施した。

研究 2：2020 年は、マニュアル作成のための基礎資料を得ることを目的に、1)COVID-19 に関する医療者の心のケアに関連した国際機関や専門学会が提示するガイドラインや先行研究をレビューし、心のケア実践に求められる介入内容と手法を概観すること、2)COVID-19 陽性患者を受け入れている病院に勤務する精神看護専門看護師 17 名を対象にインタビュー調査を行った。

研究 3：2020 年 6 月～ 8 月に、関東圏内の看護系大学 1 校に在籍する学生 1 ～ 4 年生を対象にウェブアンケートを実施した。調査項目は、個人属性、COVID-19 関連ストレスと日常生活への影響、日常生活ストレス、精神的健康、睡眠状態、不眠症重症度とした。結果、学生 432 名中 293 名がアンケートに回答した (回答率 67.8 %、有効回答率 100 %)。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

研究 1：（1）心不全患者の睡眠状態、精神状態、セルフケアに関する実態調査は、コロナ禍により計画したスケジュールより遅れたものの、171 名から回答を得てデータ収集を終了した。現在、データ分析結果を整理し、論文投稿準備中である。（2）生体センサを用いた睡眠データの収集・集約に関する実施可能性の検討では、5 名の被験者から収集した生体センサを介した睡眠データ、Google form を活用した自己記入質問紙のデータを統合し、睡眠状態の評価および「こころと眠りの支援プログラム」で活用できる視聴覚教材の開発について検討することができた。

研究 2：17 名の対象者にインタビューを行った。データ分析の結果、精神看護専門看護師は、感染症パンデミック下において、専門看護師としての機能を活用しながら看護師・看護チームが直面している危機的状況への介入を行っていることが明らかになった。

研究 3：看護学生は外出自粛生活に伴い入眠時間や起床時間が遅くなり、入眠困難と熟眠感の欠如を自覚している者の割合が他の項目に比べて高いこと、特に 1 年生の精神的健康度が低く、人とのつながりが持ちづらいことへのストレスが他の学年と比べて有意に高いこと、人とのつながりが持てないことへのストレスが精神的健康に影響していることが明らかになった。本研究成果を SFC 学会で口演発表（web）し、さらに本結果から得られた知見をもとに、看護学生に対するより良い睡眠にむけた心理教育を web 上で行った。

2. 今後の課題、展望

研究 1：今年度の研究結果を基盤にした「こころと眠りの支援プログラム」を作成し、ベッドマット式睡眠センサによる睡眠モニタリングシステムを構築し、2021 年度中に心不全患者を対象としたパイロットスタディのための研究倫理審査申請を行う予定である。

研究 2：インタビューデータの分析をすすめ、今後、関連学会への論文投稿を行う予定である。

研究 3：2021 年度中に関連学会誌に論文投稿予定である。

3. 2020 年の業績

・野末聖香、杉山暢宏編集 , 日本うつ病学会気分障害のガイドライン検討委員会制作（2020）; うつ病看護ガイドライン . 日本うつ病学会 https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/iinkai/katsudou/data/guideline_kango.pdf

・野末聖香（2020）; 看護におけるアサーション・トレーニング , 精神療法 ,46(3),324-329.

・福田紀子 (2020). 医療事故に関わったスタッフを支える . 日本看護協会出版会 .

・平岩千明 (2020). 精神状態の急性増悪に直面した家族の体験に関する文献検討 . 日本看護科学会誌 . 40, 305 - 311.

・松本奈央 , 野末聖香 , 福田紀子 (2020). COVID-19 による外出自粛生活における看護系大学生の睡眠と精神的健康の実態 . 慶應 SFC 学会学術交流大会 2020.

老年看護における Evidence Based Practice の促進に関する研究

深堀　浩樹　　慶應義塾大学看護医療学部　　教授

A. 目標

老年看護において科学的根拠に基づく実践（Evidence Based Practice）を促進することにつながる研究活動を行う。

B. 計画および実施過程

上記の目標に沿う活動として、量的・質的研究や教育介入に関する研究を実施し、論文発表を行った。その他、国内の看護職者（研究者・実践家）に対する啓発を目的として看護職向けの商業誌での記事の執筆等も行った。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

査読付き論文 11 件を公表し、学会発表 7 件を行い、国内の学会誌・商業誌に 7 件の記事を執筆することができた。うちいくつかは臨床看護師との活動であった。

2. 今後の課題、展望

看護・医療・福祉領域における臨床実践の質の向上に寄与し、社会的にもインパクトのある研究成果を公表し、社会実装につなげるように努めていく。

3. 2020 年度の業績

【論文】

1. Higuchi, A., Yoshii, A., Takita, M., Tsubokura, M., Fukahori., H, & Igarashi, R. (2020). Nurses' perceptions of medical procedures and nursing practices for older patients with non-cancer long-term illness and do-not-attempt-resuscitation orders: A vignette study. Nurs Open, 7(4), 1179-1186.

2. Hirooka, K., Nakanishi, M., Fukahori, H., & Nishida, A. (2020). Impact of dementia on quality of death among cancer patients: An observational study of home palliative care users. Geriatr Gerontol Int, 20(4), 354-359.

3. Kodama, Y., Fukahori, H., Tse, M., & Yamamoto-Mitani, N. (2021). Pain Prevalence, Pain Management, and the Need for Pain Education in Healthcare Undergraduates. Pain Manag Nurs, 22(3), 408-413.

4. Nasu, K., Konno, R., & Fukahori, H. (2020). End-of-life nursing care practice in long-term care settings for older adults: A qualitative systematic review. Int J Nurs Pract, 26(2), e12771.

5. Nasu, K., Sato, K., & Fukahori, H. (2020). Rebuilding and guiding a care community: A grounded theory of end-of-life nursing care practice in long-term care settings. J Adv Nurs, 76(4), 1009-1018.

6. Okumura-Hiroshige, A., Fukahori, H., Yoshioka, S., Nishiyama, M., Takamichi, K., & Kuwata, M. (2020). Effect of an end-of-life gerontological nursing education programme on the attitudes and knowledge of clinical nurses: A non-randomised controlled trial. Int J Older People Nurs, 15(3), e12309.

7. 森陽子 , & 深堀浩樹 . (2020). 訪問看護事業所による就業時の教育的支援への臨床経験を持つ新人訪問看護師の認識 . 日本看護評価学会誌 , 10(1), 31-39.

8. 真志田祐理子 , & 深堀浩樹 . (2020). 消化器外科病棟で手術を受ける後期高齢者にクリニカルパスを使用する中での看護実践　質的内容分析 . 日本看護管理学会誌 , 24(1), 220-231.

9. 大河原啓文 , 深堀浩樹 , & 遠藤拓郎 . (2021). 回避可能な救急搬送・入院を予防する介入の有効性と実行可能性に関する有料老人ホーム施設長の認識 . 老年看護学 , 25(2), 39-50.

10. 大河原啓文 , 深堀浩樹 , 山川みやえ , 諏訪敏幸 , & 佐藤可奈 . (2020). 高齢者ケア施設から急性期病院への回避可能な搬送や入院を削減する看護師主導の介入　スコーピングレビュー . 日本在宅救急医学会誌 , 4(1), 79-89.

11. 福田俊輔 , 遠藤拓郎 , 大河原啓文 , 深堀浩樹 , 吉井肇 , 安藤大吾 , 小波本直也 , 吉田徹 , 平泰彦 , & 藤谷茂樹 . (2021). 有料老人ホームの介護・看護職員を対象とした急変時対応教育プログラムの効果.　日本臨床救急医学会雑誌 , 24(1), 1-8.

【学会発表】

1. 深堀浩樹 , 山川みやえ , 酒井郁子 , & 山本則子 . (2020). COVID-19 感染拡大時の介護施設での感染予防のためのアクションリストの配信と普及 . 日本看護科学学会学術集会講演集 , 40 回 , O22-07.

2. 深堀浩樹 . (2021).「高齢者ケアのために新型コロナウイルス対応情報を発信する会」の活動経験から考えるポストコロナ時代における家族看護学 . 家族看護学研究 , 26(1-2), 257.

3. 村上寿子 , 皆吉泰知 , 田村貴子 ., 廣山奈津子, & 深堀浩樹 . (2020). HCU における患者が不快に感じる「音」の内容調査 . 共済医報 , 69(Suppl.), 59.

4. 白川翔 , 管野貴仁 , 矢口秀穂 , 塚田真由美 , 廣山奈津子 , & 深堀浩樹 . (2020). 術前患者の不安軽減に関する質的研究を活用した教育的介入の影響 . 共済医報 , 69(Suppl.), 60.

5. 野中瑞穂 , 青山真帆, 中西三春 , 山川みやえ , 深堀浩樹 , 佐藤一樹 , 高橋在也 , 長江弘子 , 森田達也 , 坂井志麻 , & 宮下光令 . (2020). 認知症の Good Death とは何か？　遺族・医師・看護師・介護職の認識に関する Web 調査 . Palliative Care Research, 15(Suppl.), S208.

6. 友滝愛 , 酒井郁子 , 奥村朱美 , 津田泰伸 , & 深堀浩樹 . (2020). 専門看護師の「根拠に基づく実践」のた

めの文献の批判的吟味とその学習に影響する要因 . 日本看護科学学会学術集会講演集 , 40 回 , O7-03.

7. 廣岡佳代 , & 深堀浩樹 . (2020). 在宅終末期ケアにおける訪問看護師の介護職に対する支援 . 日本看護科学学会学術集会講演集 , 40 回 , P18-042.

【その他】

1. 深堀浩樹 . (2020). ヘルスサービス研究における混合研究法による研究の質 . 看護研究 , 53(2), 118-120.

2. 真志田祐理子 , 大河原啓文 , & 深堀浩樹 . (2020). CONSORT-EHEALTH Web ベースおよびモバイル端末による保健介入の評価レポートの改善および標準化 . 看護研究 , 53(2), 144-145.

3. 那須佳津美 , & 深堀浩樹 . (2020). ENTREQ 質的研究の統合の報告における透明性を高める ENTREQ 声明 . 看護研究 , 53(2), 98-99.

4. 友滝愛 , 加藤尚子 , 柏原康佑 , 木戸芳史 , 本田順子 , & 深堀浩樹 . (2020). GREET 根拠に基づく実践の教育的介入と教育の報告ガイドライン (GREET). 看護研究 , 53(2), 152-153.

5. 廣岡佳代 , 松本佐知子 , & 深堀浩樹 . (2020). StaRI 実装研究の報告基準に関する StaRI 声明 . 看護研究 , 53(2), 116-117.

6. 本田順子 , & 深堀浩樹 . (2020). 組織のケーススタディの方法論的フレームワークの開発 迅速レビューとコンセンサス形成プロセス . 看護研究 , 53(2), 150-151.

7. 友滝愛 , 加藤尚子 , 柏原康佑 , 木戸芳史 , 本田順子 , & 深堀浩樹 . (2020). Explanation and elaboration paper(E&E) for the Guideline for Reporting Evidence-based practice Educational interventions and Teaching(GREET) 2016 概説 : 根拠に基づく実践の教育的介入と教育の報告ガイドライン (GREET)2016. 看護研究 , 53(3), 222-227.

1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者教育プログラムの開発
2. 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

大坂　和可子　慶應義塾大学看護医療学部　　准教授

A. 目標

医療に関連する意思決定支援の充実、標準化を目指し、患者、家族、医療者が共有できる意思決定支援ツールの開発方法と活用方法の普及 , 実装の促進につながる研究活動を行う。

B. 計画および実施過程

1.　がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム開発

1）ディシジョンエイド開発支援を希望する医療者を対象に、講義資料試作版を用いた講義、継続的な情報提供、助言を行い、ディシジョンエイド開発を促進する。

2）教材および開発したディシジョンエイドの公開に向けウェブサイト作成を進める。

2.　産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

産科医療施設医療者対象の共有意思決定支援教育プログラムの立案を行う。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者教育プログラムの開発

2020 年度は、がん及びそれ以外のディシジョンエイド開発と活用に共通する情報を集約した講義試作版を作成し、ディシジョンエイド開発予定の医療者グループ 1 グループを対象にオンラインにて講義を実施した。受講後、了承の得られた受講者からフィードバックを得た結果、おおむね内容はわかりやすかったと回答が得られたが、さらに、活用の留意点、開発にあたりうまくいった点、開発に関する実際の体験談を知りたいとの声も聞かれた。上記 1 グループを含むディシジョンエイド開発支援を希望する医療者 3 グループ（重症心不全の治療選択、乳がん患者の乳房再建選択、遺伝性乳がん卵巣がん症候群に関する選択）に対し、講義、継続的な情報提供、ディシジョンエイド試作版に対する助言を含む支援を実施し、ディシジョンエイド開発を推進した。

2）産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

2020 年度は、研究代表者および研究協力者と協力し、産科医療施設の医療者向けの共有意思決定支援教育プログラム作成、研究計画立案を実施した。教育プログラムは、欧米の先行研究および、インタビュー調査を踏まえた内容とし、多職種による共有意思決定を含むこととした。また、COVID-19 の影響を受けにくいこと、受講者がどこでもアクセスできることからオンラインにてプログラムを提供することとした。プログラムは、基本を学ぶオンデマンド講義（3 部構成）と個人ワーク、施設毎にメンバーが集まるオンラインディスカッションで構成した。Feasibility study の計画を立案し、研究代表者の所属する倫理審査委員会にて承認を得た。

2．今後の課題、展望

ディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラムの洗練、ディシジョンエイド開発経験のある医療者を対象としたヒアリングによる修正、開発を希望する医療者への提供、プロセス評価を実施予定である。産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究では、共有意思決定教育プログラムの Feasibility study を 3 施設の協力を得て実施する予定である。

3．2020 年度の業績

【論文】

1. Eri Shishido, Wakako Osaka, Ayame Henna, Yuko Motomura, Shigeko Horiuchi. Effect of a decision aid on the choice of pregnant women whether to have epidural anesthesia or not during labor. PLoS One,2020;15(11): e0242351. doi: 10.1371/journal.pone.0242351.

2. Kazuhiro Nakayama, Wakako Osaka, Nobuaki Matsubara, Tsutomu Takeuchi, Mayumi Toyoda, Noriyuki Ohtake, Hiroji Uemura. Shared decision making, physicians' explanations, and treatment satisfaction: a cross-sectional survey of prostate cancer patients. BMC Medical Informatics Decision Making. 2020; 20(1): 334. doi: 10.1186/s12911-020-01355-z.

【その他】

1. 医療の場におけるチームで取り組む意思決定支援】治療の選択に関する意思決定支援 ディシジョンエイドを活用した支援（解説）. 保健の科学、2020；62（5）: 315 － 320.

2. 第 12 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会シンポジウム 2「多様性を理解し、支える医療コミュニケーション」シンポジスト , 2020 年 9 月 26 日～ 27 日 , オンライン開催.

3. 第 40 回日本看護科学学会学術集会シンポジウムⅡ「医療における当事者・家族意思決定支援の実装」シンポジスト , 2020 年 12 月 12 日～ 13 日 , オンライン開催.

4. 大坂和可子：寄稿「悩ましい医療の選択を助ける意思決定ガイド」. 週刊医学界新聞（看護号）. 2021 年 3 月 22 日：第 3413 号 ; p4, 医学書院.

人びとの Well-being を目指す マインドフルネスと コンパッションによるプロジェクト

朴　順禮　　慶應義塾大学看護医療学部　　専任講師

A. 目標

患者および家族、医療従事者への Well-being を目指す効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へマインドフルネスとコンパッションによる心のケアの実践と普及を目指す。

B. 計画および実施過程

1）患者・家族および医療従事者へのマインドフルネスプログラムの研究開発
2）マインドフルネス・コンパッションに関する教育・普及活動

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス Mindfulness for Health professionals building Resilience and Compassion:　MaHALO プログラムの効果研究―無作為化試験―の実施

MaHALO プログラムの効果検証の目的で、RCT による研究を実施した。主要評価項目であるストレス度（Perceived Stress Scale）が、介入群において待機群より有意に改善し、その効果は介入が終了した 4 週間後も持続していた。レジリエンス、主観的幸福度、セルフコンパッション、マインドフルネスなども良好な結果を示した。

本研究結果は、緩和・支持・心のケア合同学術大会 2020 年 8 月（WEB 開催）において、最優秀演題を受賞した。

2．今後の課題、展望

COVID-19 の影響により、がん患者および医療従事者に対する直接参加型のワークショップ実施が困難な状況を考慮し、WEB やハイブリットを活用したマインドフルネス介入のためのプログラムを検討していく。

3．2020 年度の業績

【論文】

・　Park S, Sato Y, Takita Y, Tamura N, Ninomiya A, Kosugi T, Sado M, Nakagawa A, Takahashi M, Hayashida T, Fujisawa D. Mindfulness-based Cognitive Therapy for Psychological Distress, Fear of Cancer Recurrence, Fatigue, Spiritual Wellbeing and Quality of Life in Patients with Breast Cancer － a Randomized Control Trial. J Pain Symptom Manage. 2020 Feb 24. pii: S0885-3924(20)30103-2. doi: 10.1016/j.jpainsymman.2020.02.017.

・ Tamura N, Park S, Sato Y, Takita Y, Morishita J, Ninomiya A, Kosugi T, Sado M, Mimura M, Fujisawa D*. Study protocol for evaluating the efficacy of Mindfulness for health professionals building resilience and compassion program (MaHALO program): a randomized, waiting-list controlled trial. The Journal of Psychosocial Oncology Research and Practice (2020) 2:2(e22). DOI: http://dx.doi.org/10.1097/OR9.0000000000000022

・ Ninomiya A, Sado M, Park S, Fujisawa D, Kosugi T, Nakagawa A, Shirahase J, Mimura M. Effectiveness of mindfulness-based cognitive therapy in patients with anxiety disorders in secondary-care settings: A randomized controlled trial.Psychiatry Clin Neurosci. 2020 Feb;74(2):132-139. doi:10.1111/pcn.12960.

・ Sado M, Kosugi T, Ninomiya A, Nagaoka M, Park S, Fujisawa D, Shirahase J, Mimura M. Effectiveness and cost effectiveness of Mindfulness-Based Cognitive Therapy for improving subjective well-being among healthy individuals: study protocol for a randomised controlled trial. JMIR Res Protoc. 2020 May 8;9(5):e15892.doi: 10.2196/15892.

【その他】

＜学会発表＞

・ 藤澤大介、朴順禮、佐藤寧子、瀧田結香、田村法子、森下純子、佐渡充洋、二宮朗、小杉哲平、石井亮太、三村 將．マインドフルネスとコンパッションに基づく医療従事者のストレス・燃え尽き低減プログラムの効果 : ランダム化比較試験．緩和・支持・心のケア合同学術大会 2020 年 8 月（WEB 開催） 最優秀演題 受賞

・ 藤澤大介、朴順禮．マインドフルネスとコンパッションに基づく医療従事者のストレス・燃え尽き低減プログラムの効果 : ランダム化比較試験（シンポジウム）「緩和ケアを専門とする医療者の人材育成とそのための支援～緩和ケアの未来をつくる礎に～」座長：伊勢雄也、小山敦子、演者：久保田靖子、荒尾晴惠、中川貴之、中村陽一．緩和・支持・心のケア合同学術大会 2020 年 8 月（WEB 開催）

・ 朴順禮、藤澤大介、佐藤寧子、瀧田結香、田村法子、森下純子、佐渡充洋、二宮朗、小杉哲平、三村將．コンパッション (Compassion) とは何か？ マインドフルネスプログラムを体験した医療従事者が思うコンパッション．緩和・支持・心のケア合同学術大会 2020 年 8 月（WEB 開催）

・ 田中智里、二宮朗、田村法子、若泉謙太、小杉志都子、朴順禮、佐渡充洋、藤澤大介．COVID-19 流行による急性ストレスに対するマインドフルネスの継続効果：マインドフルネス心理療法経験者を対象とした横断的調査．日本マインドフルネス学会第 7 回大会．2020 年 12 月（WEB 開催）

・ 朴順禮．医療従事者のマインドフルネスとコンパッションを涵養する ―MaHALO プログラムについて― シンポジウム：ケアする人のケアを考える、第 20 回日本認知療法・認知行動療法学会年次大会．2020 年 11 月（WEB 開催）

・ 朴順禮、中村民夫、藤田一照、藤野正寛、栗原幸江．「GRACE とは？：R レクチャー」
第 3 回 GRACE 研究会年次大会．2020 年 12 月（WEB 開催）

医療的ケア児とその家族の生活の拡大につながる多職種支援

石川　志麻　　慶應義塾大学看護医療学部　　専任講師

A. 目標

多職種が連携してケアを提供することにより、医療的ケア児とその家族の QOL の向上につながったのかをアウトカムとして評価できる指標の開発を目指す。そのために、まず医療的ケア児とその家族の生活の拡大につながった多職種による支援とは何かを明らかにする。

B. 計画および実施過程

・2020 年 3 月～ 2021 年 1 月：インタビューによるデータ収集
・2021 年 2 月～：質的帰納的方法を用いた分析

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

・　半構造化インタビュー実施：医療的ケア児とその家族（以下、当事者）に対し、多職種での支援経験のある者 9 人（医師 1 、行政保健師 1 、看護師 2 、保護者 4 、相談支援専門員 1 ）を対象とした。保護者は自ら医療的ケア児を育てながら NPO 等で当事者支援に携わった経験のある者である。多職種が関わり、当事者の生活が広がったと感じる事例について出生から時系列に沿って語ってもらった。語られた事例は 13 事例であった。
・　分析：①出生～退院まで、②退院後～ 3 歳、③ 3 歳以降～就学前、④就学以降の 4 フェーズに分け、子どもの社会生活の広がりや保護者自身の時間の確保・意欲向上の局面に着目し、生活の広がりにつながる支援を QOL の向上につながった支援として分析した。共同研究者 3 人と共に、各自がインタビューを主として担当した事例の個別分析を行い、その後、統合分析を行った。

2．今後の課題、展望

・　分析結果として抽出した医療的ケア児とその家族の QOL 向上につながった多職種による支援を指標案とし、内容妥当性の検証を行う。
・　2021 年度に学会発表（第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会または 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing）を行い、指標案として精錬するための意見をもらう機会とする。

「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池　智子　　慶應義塾大学看護医療学部　　准教授

A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるため「ベストプラクティス推進プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」、「勤務環境改善へナッジの活用」、を運営し、①プログラム改訂・教材の開発、②プログラムによる教育・提供を研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行う。

さらに、医療勤務環境の改善、成人・高齢者のワクチン忌避の行動変更促進等の医療マネジメントに、行動経済学や行動科学等による知見（行動デザイン、ナッジ等）を活用した方策の開発、検証を行なう。

B. 計画および実施過程

1. ベストプラクティス推進プログラム（ベストプラクティス研修）の運営・評価

ベストプラクティス研修として、①組織が置かれている外部環境および自組織の内部環境の分析を踏まえ、ビジョンと戦略を明らかにする。②課題の現状分析と要因分析を行い、施設内外の優れた実践例（ベストプラクティス）等も参考に複数の改善策を比較検討し、実施計画を立案し、③適切な目標・評価指標を設定し、プロセス評価・アウトカム評価を行う。医療機関の部署等において約 1 年をかけて①～③を実施し活動評価を行った。高い成果を達成した活動については、④標準化・定着を図り、期待した成果が得られなかった、あるいは不明な活動については、改善点を明らかにして、次年度の活動に継続し、改善が図られるようにした。

2.　ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

これまでに作成したケース教材を用い、授業・研修で用い、授業・研修の効果を評価する。なお、SFC 研究所ケースメソッド・ラボのメンバーとして看護分野のケース作成に参画している他、「ケースとデータに基づく病院経営人材育成」（文部科学省課題解決型人材養成プログラム）の病院経営ケース作成タクスフォースの委員として、ケース作成を行っている。

3.　医療勤務環境改善に資する Nudge 開発

「医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会」を設立し、行動経済学・行動科学等の行動インサイトの知見を活用し、医療機関・介護施設の職場をよりよくするための仕掛け・システムの開発・研究・教育を行なう。

4.　高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト

2020 年 12 月 Global Coalition on Aging and Pfizer Medical Grants の The Vaccines for All: Longevity Unleashed for Everyone (VALUE) に採択されたのを受け、自治体、医療関係者、研究者（看護学、医学、薬学、公衆衛生学、感染症学、行動経済学、デザインマネジメント等）、NPO/ 企業等のメンバーで構成される官民産学チームによる「齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェ

クト（Improving immunization coverage among 65 years and older population in Japan － developing new tools for vaccine promotion and tracking of vaccine usage)」（2021 年 1 月～ 2024 年 3 月）を立ち上げた。なお、このプロジェクトは Johns Hopkins Univeristy, International Vaccine Access Center と連携して実施する。

2021 年度は、デスクサーチと研究デザインの検討、研究フィールドとなる自治体への協力要請等を行なう。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1)「ベストプラクティス推進プログラム」の実施と評価（同じでいいか～）

2 医療機関で改定した研修プログラムを実施した。計 22 の職場（病棟・外来・手術室）が約 8 ヶ月～ 1 年間にわたり、医療安全・感染管理・看護の質改善（ケア提供システム改善・標準化等）・労働安全衛生・入退院支援等に関する質の改善活動に取り組んだ。各職場の活動評価（中間・成果発表、成果資料）を看護部長・教育担当の看護管理者等と質的に分析し結果、①プロセス評価・アウトカム評価が適切に行なわれ、活動と成果の可視化が促進された、②看護単位内だけでなく、外来部門、多職種部門と連携をすることによって、より効果的に問題解決を図るケースが増加してきた、③各看護単位において質改善のモデル・手法が定着ており、質改善活動が継続的に実施され職場文化となってきた、④本プログラムの活動を通してリーダーシップ力が育成されている等の効果が確認された。

2）「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」の実施と評価

以下の教育機関等で教育プログラムを実施した。

【2020 年度ケースメソッド教育実施大学・機関等】

・学部教育：慶應義塾大学看護医療学部「移行期看護」「ナーシングマネジメント実践実習」

・大学院教育：慶應義塾大学健康マネジメント研究科「看護管理論」「看護政策論」、神戸大学大学院保健学研究科 / 保健師コース「公衆衛生看護管理論」

・現任教育：認定看護管理者研修課程：東京都看護協会（セカンド）、神奈川県看護協会（セカンド）、兵庫県看護協会（サード）、茨城県看護協会（サード）、岩手県看護協会（ファースト、サード）、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）認定看護管理者研修課程（サード）

授業・研修終了後、授業計画と授業評価（時間構成、発言数・時間）、受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析し、①問題の原因分析力、②解決策を比較検討する統合力、③説明力を総合的に評価した。

3） 医療勤務環境改善に資する Nudge の開発 研究・教育

医療安全分野のナッジ開発、新型コロナ感染対策におけるナッジ開発を行なった。

また、医療・介護従事者の現場でのナッジ設計を支援するため、OECD. Behavioural Insights Toolkit and Ethical Guidelines for Policy Makers（OECD; 2018） ならびに EAST Four simple ways to apply behavioural insights（The Behavioural Insights Team；2012) を参考に、ナッジ設計ツールを開発し、ナッジ設計ワークショップ開催した。

第 2 回研究大会（2020 年 12 月 6 日 Online 開催）では、2 つの教育講演（「そのメッセージ、ナッジでもっと伝わります」「自治体でのナッジ活用)」と 2 つの研究ディスカッション（「COVID-19 感染予防対策×ナッジ」「医療安全対策にナッジの視点を！」）を開催した。

4） ワクチン忌避行動変容プロジェクトの推進

2021 年 2 月に VALUE（The Vaccines for All: Longevity Unleashed for Everyone）プロジェクトがスタートした。VALUE には、本プロジェクト（高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト：VALUE Behavioural Insights Project）の他、日本医療政策機構、The International Longevity Centre-UK（国際長寿センター）の 3 つ研究プロジェクトが採択され、VALUE 本部である Global Coalition on Aging（GCOA）と連携し、3 ヶ月毎の情報交換をしながら、社会に向けて広く成果を発信していく予定である。

第 1 回セミナー「市民との対話で市中感染を防ぐ：ワクチン・コミュニケーション」(2021.3.27 Online) を開催したほか、自治体向けの説明会を開催し、研究に参加する自治体の募集を行なっているところである。

2．今後の課題、展望

「ベストプラクティス推進プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、新型コロナウィルス感染対策下における看護管理上の取り組みに焦点をあて継続して実施し、効果の検証と普及を行う。「医療勤務環境改善に資する Nudge 開発」においては、医療安全対策・感染対策も含めて行動インサイトやデザインを活用した問題解決の開発研究と普及をすすめていく予定である。

また、2021 年 2 月より開始した、「高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト」を推進し、研究サイクルのステップ 2（デザイン思考によるワクチン忌避のボトルネック・アセスメント）を複数自治体で実施する予定である。

3．2020 年度の業績

【書籍】

【関連論文】

1) 小池智子 (2020)：未来の看護に貢献する「構想力」を鍛える , 看護管理

2) 小池智子（2020）：先端テクノロジー , Expert Nurse 36(4)P91-99.

3) 小池智子 (2021): 医療勤務環境改善にナッジを活かそう！， 看護のチカラ 556：p6-11.

4) 小池智子 (2021)：ナッジで感染対策を設計しよう（特集「感染対策をナッジで後押し」）, 看護 73(7)：64-71.

【関連学会発表等】

1) 小池智子：2040 年に向けた看護マネジメントの課題 - マネジメント選択肢としての「ナッジ」, 東京都立広尾病院　看護師長・副看護師長マネジメント研修 .(2020.6.8, online)

2) 小池智子 , 水野基樹 , 伊藤清子他：医療勤務環境改善を促進する「ナッジ」設計を学ぼう，第 24 回日本看護管理学会学術集会・インフォメーションエクスチェンジ（2020.8.29 Online）

3) 小池智子：よりよい意思決定に向けたナッジの活用～看護現場をよくする仕掛け～ , 大阪府看護協会看護研修会 ..(2020.10.7, 大阪)

4)　小池智子：政策決定プロセスにおける看護管理者の役割 -Evidence Based Policy Making-, 公益社団法人 日本看護協会 神戸研修センター ..(2020.10.29, Online)

5)　2040 年に向けた医療政策動向と看護マネジメントの課題 , 公益社団法人医療・病院管理研究協会 看護管理研修（2020.10.31,Online)

6)　小池智子：現場の活動をよりよくする仕掛けナッジの活用 , 東京都病院幹部マネジメント研修 .(2020.11.27 Online)

7)　小池智子：ナッジで「アゲル！」, 新選医チバ 第 9 回セミナー (2020.12.13 Online)

8)　小池智子：ナッジ×保健医療 -: より良い選択をそっと後押し , 藤沢市民講座 第 3 回 (2020.12.19. Online)

9)　渡辺穂香 , 小池智子：医療安全対策にナッジの視点を！内服薬投与事故のプロセス分析：多職種間コミュニケーションに焦点をあてて , 第 2 回医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会 (2020.12.6 Online)

10)　中村希美 , 高堀香菜 , 木村光里 , 桑原日菜子 , 齊藤さくら , 杉浦美帆 , 小池智子：ナッジを用いた COVID-19 感染対策の開発と普及 , 第 2 回医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会 (2020.12.6 Online)

11)　Tomoko Koike, Kana Kobayashi, Lois Privor-Dumm: Improving immunization coverage among 65 years and older population in Japan　－ developing new tools for vaccine promotion and tracking of vaccine usage, (2021.3.5, online)

12)　小池智子：VALUE Behavioural Insights Project 第 1 回セミナー「市民との対話で市中感染を防ぐ：ワクチン・コミュニケーション」(2021.3.27 Online)

13)　小池智子：ナッジ×感染予防ワークショップ (2021.3.28 Online)

【報道】

1）　行動経済学、コロナ対策に：ナッジ理論　よい選択そっと後押し【共同通信社の配信】北海道新聞、東奥日報、デーリー東北（以上青森）、秋田魁、山形新聞、福島民友新聞、下野新聞、神奈川新聞、静岡新聞、岐阜審美新聞、神戸新聞、日本海新聞（鳥取）、愛媛新聞、高知新聞、佐賀新聞、熊本日日新聞、南日本新聞（鹿児島）等　(2020.7.17-7.30)

2）　Global Coalition on Aging and Pfizer Medical Grants Partner to Tackle Vaccine Hesitancy in Super-Aging Japan.(17 February 2021.)
https://globalcoalitiononaging.com/2021/02/17/%E2%80%8B%E2%80%8B%E2%80%8B%E2%80%8B global-coalition-on-aging-and-pfizer-medical-grants-partner-to-tackle-vaccine-hesitancy-in-super-aging-japan/

倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

宮脇　美保子　慶應義塾大学看護医療学部　教授

A.　目標

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

臨床における看護師の倫理的実践を推進するためのリーダー養成に関する研修プログラム・教材を開発する。

B. 計画および実施過程

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラムに関する文献検討。

1) 倫理的看護リーダー研修プログラムを試行する。
2) 倫理的研修プログラムを実施している海外施設を視察、情報交換する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

1) 倫理的看護リーダー研修プログラムを試行した。

2020 年 4 月に実施予定であったが、コロナ感染拡大で対面での研修は 3 回延期された。

このまましばらく感染は続くことが予想されため、オンラインによる研修に変更した。

実施期間は、2021 年 1 月 9 日 (土) ～ 3 月 31 日 (月) である。プログラムの 1 つであるワールドカフェ形式の GW は、通常の GW に変更し、その他は、予定の教材を使用して実施した。研究協力施設もコロナ患者の対応をしていたが、研究参加者である中堅看護師 14 名は、倫理的リーダーシップを身につけたいという意欲が高かった。研修は、5 回実施した。看護専門職と倫理、倫理理論、事例検討、チーム医療、ケアリング等ともに、倫理的リーダーシップのスタイルとしてサーバントリーダーシップを選択した。アンケートからは、研修を重ねる度に、学んだことを実践の場で役立てようとする意識の変化、行動の変容が見られた。一部、コロナ対応やそれに伴う人員不足により、看護師が疲弊しており、部署のスタッフに働きかけることに困難さを感じている参加者もいた。

2) 看護実践における倫理に関する講演を行った。

3) 海外視察は、コロナ感染拡大により、次年度に検討する。

２．今後の課題、展望

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

1)　各研修後に提出されたアンケート結果を分析し、学会発表、論文投稿を準備する。

３．2020 年度の業績

1)　宮脇美保子 (2020): 改訂身近な事例で学ぶ看護倫理、中央法規 .

2)　宮脇美保子 (2020): 看護基礎教育における看護と哲学 , 日本医学哲学・倫理学会 ,88-92

3)　古田真弥子、宮脇美保子 (2020): 患者・家族の個別ニーズに応答する看護師のケアを支えるもの , 日本医学哲学・倫理学会 ,31-40

4)　宮脇美保子（2020）：東邦大学主催　シンポジウム「生命倫理」シンポジスト (2020.7.4 Online)

5)　宮脇美保子 :「倫理に基づく看護実践」、東京都看護協会 主催研修会講師 , 2020.9.18

6)　宮脇美保子 :「ケアの受け手と周囲の人への意思決定支援」沖縄県看護協会研修会 (2020.10.1. Online)

7)　宮脇美保子 :「新人看護師のための看護倫理」横須賀共済病院研修会 (2021.1.23. Online)

8)　宮脇美保子 :「看護教育における看護倫理」沖縄県看護教育協議会 研修会 (2020.12.24. Online)

ケアリング文化の醸成 - 教育におけるユマニチュードの導入

宮脇美保子　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福井　里佳　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
山本　亜矢　慶應義塾大学看護医療学部　講師
松嵜　　愛　慶應義塾大学看護医療学部　助教
秋元　直子　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

◆ケアリング文化の醸成

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

◆ケアリング文化の醸成

人と人の関係性を築くことを理念とする「ユマニチュード」の理解を深め、教育・実践の場に浸透させていく。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

◆ケアリング文化の醸成

山本亜矢　科学研究費助成事業基盤研究（C）2018-2022

課題〈糖尿病足病変による中足骨切断患者の歩行分析と生活の質に影響する要因の検討〉

2019 年度行った文献検討にて、研究計画書の再構築のための準備を行った。しかしながら COVID-19 の影響で、共同研究者との会議や施設内における準備、実践が不可となり、当初の計画通り進めることができなかった。 2019 年度に日本下肢救済・足病学会で示説発表を行った文献検討「糖尿病足病変予防における足底装具の素材と足圧との関連」については現在論文執筆、投稿準備中である。

山本亜矢 2020 年度 慶應義塾大学 , 慶應義塾学事振興資金（個人研究）

課題〈米国における「患者移動介助技術」に関する基礎看護学テキストの分析〉

わが国における患者移動介助技術は、患者の持ち上げや抱え上げが基本であり、1945 年に米国で提唱された「ボディメカニクス」によって行うことが現在も教示されており、いまだ看護師の腰痛有訴率は高い。しかし、現在の米国では 2003 年に患者の移動介助技術に関する科学的根拠に基づくガイドライン「Safe Patient Handling and Movement（以下 SPHM）」が開発され、看護師の筋骨格系障害の発症率が減少した。そこで、SPHM が導入されている米国で使用されている基礎看護学テキスト 3 件を抽出し、「ボディメカニクス」「安全な患者移動介助技術」に関する記述内容の検討を行った。米国の基礎看護学テキストには、ボディメカニクスの定義やボディメカニクス技術の活用に関する記載はなく、「人間工学に基づく身体の動きを取り入れること」、「SPHM 技術の活用が患者移動介助技術の基準である」ことが示されていた。また、安全な患者移動介助技術は「人間工学の原則に基づいた安全な方法に置き換えること」「SPHM 技術の活用は、患者の運動や介助、移動における実践基準」「人間工学を活用して操作される専用の介助機器」「リフトチームの利用」が効果的なアプローチとして示

されていた。米国においては、看護系大学のカリキュラムにも SPHM の概念を導入し、看護学生に対しても、人間工学的な介助方法を効率的に習得、実践するための教育が行われていることを確認した。

2．今後の課題、展望

◆ケアリング文化の醸成

1)　ユマニチュードの基礎看護教育への導入およびその効果に対する実証的研究

3．2020 年度の業績

1)　Aya Yamamoto-Kon, Hiroki Fukahori, Yasuko Ogata, Midori Nagano. Validity and reliability of Japanese version of the pressure ulcer knowledge assessment tool. Journal of Tissue Viability.(in Press)

2)　渡邊敏基 , 山本亜矢．Safe Patient Handling and Movement に関する研究動向 計量書誌学的分析. KEIO SFC JOURNAL 20 (1): 284-301, 2020

3)　秋元直子 , 宮脇美保子（2020）：中堅看護師の看護の再考につながった臨地実習指導の経験に関する研究 , 第 40 回日本看護科学学会 ,(12.12. Online)

4)　メンタルケア・スペシャリスト養成講座：基礎課程「看護と介護」研修講義　2020 年 12 月 6 日（一般財団法人メンタルケア協会主催）

5)　メンタルケア研修会「高齢者や認知症の方々に対する生活援助」研修講義　2021 年 1 月 24 日（一般財団法人メンタルケア協会主催）

外来及び退院支援部署における在宅療養支援に関する研究

永田　智子　　慶應義塾大学看護医療学部　　教授

A. 目標

本研究では、移行期ケアにおける効率的なニーズ把握とケアマネジメントの方策を検討することを目的とする。

B. 計画および実施過程

2015 年度から 2020 年度にかけて、文部科学省科学研究費により外来における在宅療養支援に関する研究を継続的に実施してきた。これまでに、外来看護師による在宅療養支援に関する全国調査、外来看護師の在宅療養支援ニーズ把握に関する質的研究とその結果を用いた調査、1 病院の外来看護師を対象とした在宅療養支援に関する認識の調査等を実施してきた。

加えて、2020 年度から、文部科学省科学研究費により、患者主体の退院支援の実施に関する研究を開始した。現在は文献検討を行うとともに、慶應義塾大学病院の医療連携推進部の看護師と共に研究計画の立案を進めている。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）調査結果の公表・周知

外来看護における在宅療養支援については、書籍の刊行により一定の成果を得た。患者主体の退院支援研究については現在端緒に着いたところであり、またコロナ禍による退院支援方法の変化についても合わせて検討できるよう、研究計画を修正しながら進めている。

2. 今後の課題、展望

外来看護に関しては、大学病院における調査結果など未発表のデータがあるため、今後論文投稿を進めていく予定である。

3. 2020 年度の業績

【雑誌論文】

永田智子・田口敦子編．外来で始める在宅療養支援：ニーズ把握と実践のポイント．東京：日本看護協会出版会，2021

SFC Open Research Forum 2020 への出展

2021 年 3 月 1 日～ 12 日

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）では、その研究成果の社会への還元を自らが果たすべき重要な社会的責任の一端と考え、研究活動成果を広く社会に公開する場として「SFC Open Research Forum(ORF)」を毎年開催しています。今年度は「調融合」をテーマに、2021 年 3 月 1 日～ 12 日までオンラインで開催され、これまでの分野横断や融合的アプローチからのさらなる発展を目指すイベントでした。初めてのオンライン開催となったため、より多くの方々に「看護ベストプラクティス研究開発・ラボ」(以下ベスプラ）を知ってもらう機会となったため、ベスプラの設立目的と活動内容、3 つのプロジェクト「倫理的看護実践研究部門」、「看護実践の質保証研究部門」、「ベストプラクティス先導ナース開発研究部門」について動画を作成し、紹介しました。

ベスプラの全体紹介の動画に加えて、３つのプロジェクトの１つである、看護実践の質保証研究部門より「遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究」、「がん患者中心のケアの探求と開発」、「患者中心の意思決定支援の充実と標準化に関する研究」、「老年看護における Evidence-Based practice の促進に関する研究」、「生体センサを活用した心不全患者のための『こころと眠りの支援プログラム』開発と評価」、「人びとの Well-being を目指すマインドフルネスとコンパッションによるプロジェクト」の 6 つの研究について動画を作成し、それぞれの研究内容について紹介しました。また、若手研究者による「わかばの会」もオンライン勉強会の開催内容と今後の課題についてまとめた動画を出展しました。オンライン開催であったため、参加者からのフィードバックをいただく機会はありませんでしたが、ベスプラで個別に取り組んでいる研究内容をメンバー間で共有することができ、また、各プロジェクトの評価や今後の課題が明確になったと思います。

若手研究者の会

わかばの会

慶應義塾大学看護医療学部 専任講師
新幡　智子，田村　紀子

慶應義塾大学看護医療学部 助教（有期）
浅川翔子 , 小林良子, 杉本美希, 高橋知彦, 田久保美千代, 平岩千明, 平尾美佳 , 本田晶子,
松嵜 愛，山本香織，山本なつ紀

A. 目標

様々な専門分野の若手研究者が協働し、柔軟な発想や活気あふれる行動力を基に、創造的に研究・教育に取り組み、これからの看護学の発展や大学教育の充実への貢献を目指す。

B. 計画および実施過程

・2020 年 6 月・9 月：今年度の活動方針・計画の検討
・2020 年 12 月：第 1 回勉強会「教育評価 (ルーブリック評価) について考える」
・2021 年 1 月：第 2 回勉強会「オンライン授業の効果的な活用と課題」
・2021 年 3 月：ORF への出展（オンデマンド資料の作成）
・2021 年 3 月：第 3 回勉強会「研究と教育の両立を目指して～自己の課題の明確化と対策の検討～」
今年度の活動評価

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

今年度は、若手研究者としての課題を共有し、課題解決に向けた具体的なオンライン勉強会を企画、運営した。さらに、活動内容を社会に発信する場として、オンラインで開催された ORF（Open Research Forum）を活用し、勉強会の取り組みをオンデマンド資料としてまとめ、発表した。

1）第 1 回勉強会：「教育評価 (ルーブリック評価) について考える」

ルーブリック評価法の学習を通して、レポートや実習の評価の妥当性について学び、評価を授業の改善や学習支援に活かす方法を検討することを目的とした。ルーブリックの基本構成（課題・評価観点・評価尺度・評価基準）や特徴についての情報提供、ルーブリック評価表を用いたレポート例題の採点、実習評価のためのルーブリック評価表の作成を行った。参加者からは、「評価の視点を明らかにすること

は、講義や実習時の指導ポイントとしても重要」「教員間で同じ評価観点・基準に基づいて評価でき、定性的な課題の評価でも標準化しやすい」との意見が寄せられた。一方で、「評価表の作成に労力がかかるので、効率的な活用に向けて検討が必要」との意見もあった。今後の課題としては、一般公開されている既存のルーブリック評価表を参考にして効率的に評価法を作成する方法を検討し、実際に評価した状況を共有するなど、より実践に即した検討を進める必要があることが挙げられた。

2)　第２回勉強会：「オンライン授業の効果的な活用と課題について考える」

COVID-19 感染拡大の影響により、試行錯誤しながらオンライン授業に取り組んだ 1 年となった。そこで、次年度も続くオンライン授業をより効果的に実施できるよう、勉強会では、まず文部科学省のオンライン授業に関する情報、Blended learning、反転授業について文献や実体験をふまえて講義を行い、情報共有を行った。その後、グループに分かれて各自のオンライン授業の体験を振り返り、効果的にオンライン授業を実施する上で具体的に工夫･配慮できることについてディスカッションを行い､検討した。当日は 10 名が参加し、勉強会終了後のアンケートでは回答者全員から学習内容は非常に参考になり満足したとの回答が得られた。本勉強会により、各自が次年度に向けたオンライン授業の課題やより効果的な活用のあり方を考える機会となった。

3)　第３回勉強会：「研究と教育の両立を目指して－自己の課題の明確化と対策の検討－」

若手研究者として教育と研究活動を両立していく上での悩みや課題を共有し、対策を検討することを目的として勉強会を実施した。永田智子教授よりご自身の経験談や、研究と教育を両立していくために必要なこと等についてご講義いただき、グループメンバーでディスカッションを行った。研究と教育を両立していくための課題として、タイムマネジメントや研究に対するモチベーションの維持等について話し合った。対策としては、自身の思考を整理し、日々少しずつでも研究に取り組んでいくこと、自身の研究テーマに愛着を持ち続けること（愛着が持てるような研究テーマを見出すこと)、仲間と積極的に交流を持つことの必要性等が挙げられた。終了後のアンケートでは、参加者全員が勉強会について「非常に参考になった」､「非常に満足」あるいは「満足」と回答し、このような勉強会の開催は、メンバーにとって大変貴重な機会であり、有意義であるとの回答が得られた。今後の課題として、メンバー同士が気軽に意見交換できる場を定期的に作る必要性が考えられた。

4)　ORF への出展

2021 年 3 月にオンラインで開催された Open Research Forum(ORF) において、わかばの会での上記活動をオンデマンド資料としてまとめ、発表した。

2.　今後の課題、展望

COVID-19 感染拡大の影響により対面での活動はできなかったが、オンラインによる勉強会や交流の機会をもつことで、互いに課題や対策を共有でき、励みになった。

今後もメンバー間での意見交換の場を定期的に設けるとともに、各自の経験や勉強会での知見を活かした教育評価や効果的なオンライン授業について検討を重ねていく。

また、わかばの会での活動を通して、メンバー個々が教育と研究の統合に向けて、能力の向上と教育･研究活動の推進に努めていく。